



# からしだね

2019年3月号  
(547号)

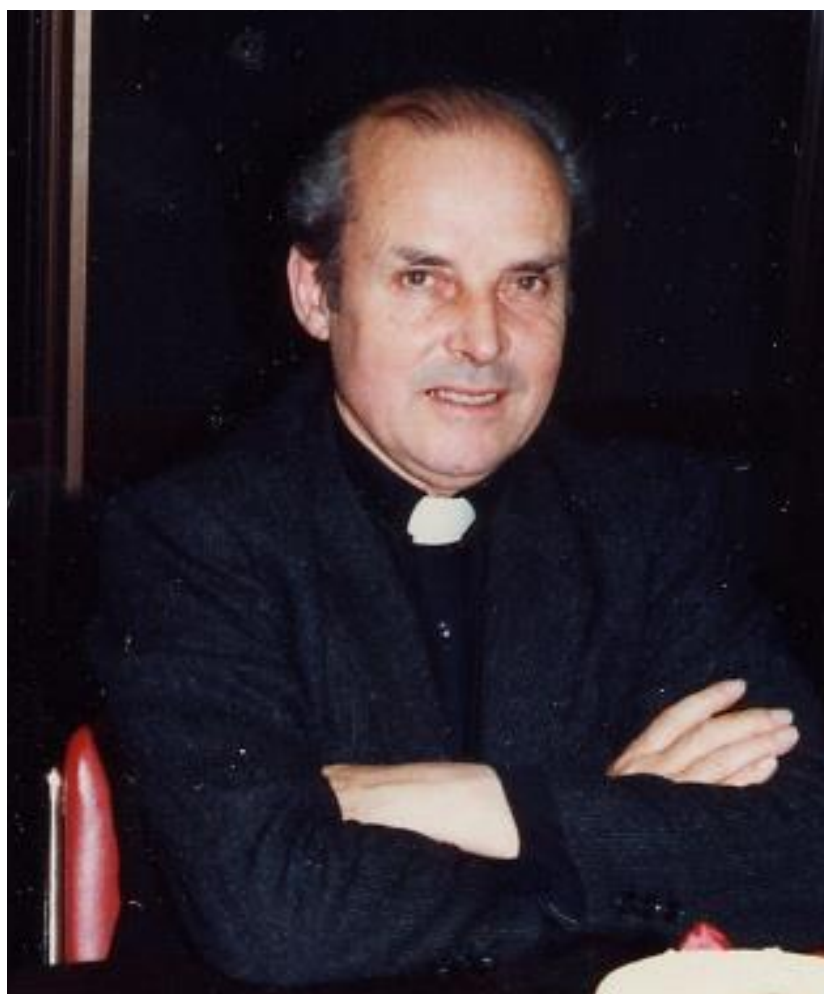
キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



## 本号の記事の主題など

特別寄稿

染野治雄神父

ガブリエル神父さまを惜しむ

「自分の柩から出て行こう」

短歌2首

ガブリエル神父様ご帰天

安らぎ招く「病者の塗油の秘跡」

ウオード神父様ご帰天

3月の教会カレンダーへの追加

大人の日曜学校だより(1月27日)

みんなの談話室

ガブリエル神父様の虹

特別寄稿

## 自分の枠から出て行こう

染野治雄 神父

春の足音とともに、四旬節が近づいてきました。

四旬節を英語ではレント(Lent)といいます。これは、“long”と同じ語源をもつ言葉だそうです。すなわち、春が近づくにしがって日がだんだんと長くなっていく、そんな季節の宗教的習慣からできた言葉なのでしょう。じっさい、眠っていたいのちが再び目覚める春は、イエスさまの御受難をおもい、復活にこころを向けるときとして、自然であり、ふさわしいときといえます(南半球ではどのような感じで四旬節や復活祭を迎えるのでしょうか?)。

さて、春になれば、どうぜんおもてに出てゆきたくになります。どこかに出かけてみたくなります。出てゆけば、新しい出会い、新しいいのちに触れることができます。フランシスコ教皇様は就任以来しばしば、わたしたちに出てゆくよう、出向いて行く教会であるよう呼びかけておられます。というのも、「出てゆく」とは、神さまの特徴をあらわすとても大切な言葉だからです。たとえば、出エジプト記3章、モーセの召命の場面にはこう書いてあります。「主は言われた。『わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。…

それゆえ、わたしは降って行き、…乳と蜜の流れる土地、…へ彼らを導き上る。』」

神さまはその耳で苦しむ人々の叫びを聞いてくださり、その目でわたしたちの姿を見てくださる方です。苦しみ喘ぐ人間の姿を見て、いてもたってもいられず、ご自分の場所から降って、出てきて、救いの手をさしのべてくださる。神とは、この世をお造りに

なって、そのまま放っておかれる方ではありません。イエスさまもおっしゃいます。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」(ヨハネ5.17)。

出て行く神さまの姿がよくわかるところです。わたしたちの信じる神は、出てゆくおかたである。別の言葉でいえば、神は生きておられます。生ける神さまに出会うためには、わたしたち人間もまた生きて、出て行くもの、すなわち自分の枠から出て行く者にならなければなりません。出てゆく、それは生きているあかしであり、生きることそのものといってよいでしょう。出てゆく神さまの姿にならうこと、これがキリスト者の姿であり、神の似姿として生きる者の姿です。

ヨーロッパやラテンアメリカの国々では、今頃の季節はカーニバルを前に気もそぞろかもしれません。ちなみに、カーニバルはキリスト教の習慣から派生したお祭りかもしれませんが、キリスト教の信仰とはあまり関係ありません。ちなみに、国井神父様は、灰の水曜日には、「肉の食べおさめだ」と言って自らステーキを振舞ってくれたことも思い出されます。それはともかく、さいわい日本では静かに春を待つことができます。イエスの受難に心をよせ、新しいいのちへの希望を新たにすること。そして、あたらしいいのちの出会いに出て行く。もつとも、神さまは冬でも春でも、待っている者がいる限り、いつでも出て行かれるのですが、とくに春はわたしたちを外へとうながします。わたしたちも、待っている人々のもとへ、ともに荒野野へ出て行きましょう。

## ガブリエル・ブレシュト 神父様ご帰天

御受難会のガブリエル・ブレシュト神父様(95歳)が2月4日(月)ご帰天になりました。

葬儀ミサは2月8日(金)11時30分から売布宝塚黙想の家にて中村克徳神父様の司式により、とり行われました。主よ、ガブリエル神父様を御許に受け入れてください。

神父様は1923年にフランス、ナント市で生まれて、1948年6月に叙階され、1971年に48歳で来日されました。御受難修道院がある阪神地区と福岡地区に在って、1983年から4年という短期間でしたが池田教会の助任司祭として信徒に対して明るい眼差しと笑顔の記憶を遺されました。

## ウオード・ビドル 神父様ご帰天

御受難会のウオード・ビドル神父様(95歳)が2月13日(水)午後4時50分肺炎のため、ご帰天になりました。

通夜は2月19日(火)19時からカトリック池田教会の聖堂で来住英俊神父様の司式により、葬儀ミサは翌20日(水)11時30分から山内十束神父様の司式により、とり行われました。

「からしだね」次号に通夜と葬儀ミサ、略歴、追悼文などを掲載します。

## 大人の日曜学校だより 1月27日

「イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに入られた」  
(ルカ 1・1 - 4、4・14 - 21)

この日は教会の教えでもある“霊”や“聖霊”について、色々な思いを打ち明けられる方がおられ、この“霊”そして“聖霊”について、考えるひとつの機会が与えられたような気がしました。もちろん、それらについて知る一番の方法はカテキズムを読むことだとは思いますが、では、私たちの日常の中で“霊”や“聖霊”について、私たちはそれをどう受けとめればよいのでしょうか、少したとえ話をして考えてみたいと思います。答えになっていないかも知れませんが、お許し下さい。

私には子がいません(ここまでは現実の話です)。ただ、もし仮に私がクリスチャンではなく、また子供がいてもやはりクリスチャンでなかったとします。けれども、その子が通っている学校のお友だちには、ひとりだけクリスチャンがいました。聞けば、そのお友だちは「父と子と聖霊を信じている」と言っているのだそうです。

そこで、私だったらどうするかを考えたとき、きっと私は子供に「それは素晴らしいことなんだよ」と教えるだろうと思います。つまり何が言いたいのかというと、『超自然的なもの(こと)を畏怖する(あるいは信じる)心に敬意を払える心を持つことは、人間にとってとても大切なことなのだ』ということ、私なら子供に伝えようとするでしょう。その意味でも、私たちが何かを信じる時、それは同時に、人の心の成長を手助けすることにもなり得るということです。ですので、“ウソ”か“マコト”かというよりも前に、その信じるのが人の環境に、そして周囲の社会にとって、どのような影響をもたらすかについて考えてみることも、私たちにとってひとつのミッションと言え

るかも知れません。

大人の日曜学校があった日、食堂ではランチ当番の方が、イノシシの煮込みうどんを用意していました。私も前の日の晩から何も食べてなくてペコペコだったので、一緒に参加されていた方と煮込みうどんをいただきました。人生でイノシシの肉を食べる日が来るなんて思いもよらなかったですが、とてもおいしかったです。

研修委員会

## 新しく日曜学校生徒を募集

日曜学校では新しい入学者を募集しています。対象者は、幼稚園の年中から小学生、中学生、高校生です。

日曜学校で一緒に聖書を読んだり、祈ったり、歌ったり、遊んだりしませんか？

洗礼を受けている・受けていないは問いません。また、初聖体準備クラスは2年生を対象としていますが、それ以上の年齢でまだ初聖体を受けておらず、希望されるお子さんも参加可能です。

新しい仲間の参加を心待ちにしています。どうぞまわりのお子さんをお誘いください。

お泊まり会も月に一度あります。小学生は原則第四週目の土曜日、中高生は第二週目の土曜日で、一年に数回合同でも実施しています。ご相談、問い合わせは日曜学校サポーターまでお願いします。

青少年育成委員会

3月のガラスケースのことば  
神がまず、私たちが愛してくださった

1 ヨハネ 4・19

## みんなの談話室 (四編)

### ガブリエル神父様の虹

北村

懐かしい神父様が又お一人旅立たれました。95歳で、すぐ96歳になられるところだったそうです。二月四日立春の朝、終油の秘跡を受けられた後飛行機が着陸するように静かに息を引き取られたと伺いました。神父様らしく素晴らしい最後だと心からお祈りました。

私が最後にお目にかかったのは稲葉さんの誓願式の時でした。ご聖体拝領の後に車椅子の神父様にご挨拶したら「覚えている!」とってくださいました。

ガブリエル神父様をご存知の方は、池田教会でどのくらいいらっしゃるでしょう。神父様への哀悼の意を込めて、私の知っている神父様の思い出を少し書かせていただこうと思います。

神父様はフランス・ナント市のご出身。15歳で修道院に入られました。南の方のご性格か、とても朗らかでチャーミングなお人柄でした。語学はとてもお得意だったようですが、私の覚えている限りでは当時日本語はあまりお得意ではなかったようで(ごめんなさい)、分からない時は大きな声で「+アヴェ・マリア」と叫んでおられました。日本には1971年、ご自身が志願して来られたと伺いました。

チョッピリあわてん坊の面もおありで、病人さんの訪問時に違う方を訪問されたり、ネズミ取りをしている同じ場所で二度も引っ掛かったり……地区集会で我が家に来られた時に、デニス神父様とガブリエル神父様のその話で大いに盛り上がり大笑いしました。警察官に止められると英語、フランス語で対応。無事にその場を逃れられたとか。

神父様は、タンポポのサラダと大根のサラダが大層お気に入りでした。私は「え、タンポポのサラダ?」と当時は驚いたものです。また、猪名川の花火大会の帰りに我が家に寄ってください、キラキラした帽子(お祭りの時に売っている)を被って、当時小学生だった我が家の子供たちと無邪気に遊んでくださったこともありました。そんな温かい思い出を私も子供たちも決して忘れない、大好きな神父様のお一人です。当時は子育てで走り回っていた私に対しても、ヨーロッパの紳士的なマナーでしょうか、一人のレディとして接してくださいましたことを心から感謝しています。勿論他の方々にも同様だったと思います。

神父様の大好きな聖歌はカトリック聖歌集482番(聖体拝領 小児)の「わたしのむね」でした。

♪わたしのむねに きてちょうだい

いつもなつかし イエズさま

白ホスチア イエズさま

なつかしうれし いただきます (1番のみです) ♪

私もこの可愛い聖歌が大好きで、神父様と一緒に歌っていました。

たまたまご聖体訪問した時には、オルガンを弾きながら典礼聖歌52番「神の計らいは限りなく〜 ♪」と歌っておられた歌声も忘れることが出来ません。単にお声が良いと言うだけではなく神父様の魂の声を感じたからです。オルガンも大変お上手でした。音楽の才能もおありだった由です。

また、当時は多くの神父様方は煙草を吸っていらしたのですが、ガブリエル神父様は吸う前に必ず「May I smoke?…煙草を吸ってもいい?」と聞いてくださいました。私が冗談っぽく「Never !…絶対にダメです!」とお応えすると「おー、それはきついお言葉!」と冗談ぽく返ってきたものです。とにかく温く笑いの絶えない方でした。

宗像に移られて寂しくなりましたが、後に洗礼を受けた両親には時々お電話をくださっていたようです。両親が亡くなった時にも温かいお電話をいただきました。本当に素朴で朗らかでマリア様が大好きな幼子のようなお心の神父様でした。



2008年5月には福岡地区で叙階60周年記念ミサと祝賀会が開かれた

旅立たれた日は、息子の誕生日で夕方食事に出かけたのですが途中で《虹》を見ました。久々に見るとても美しい《虹》でした。それで、息子と思わず「あ、ガブリエル神父様の《虹》だ!」と叫んでいました。その虹が、神父様は天国に昇られたと告げてくれたと感謝しました。

神様の愛を教えてくださいました神父様、私も神父様のように人を愛することが出来ますように!

† AVE MARIA

## ガブリエル神父さまを惜しむ

直

95歳だった。今月4日に亡くなる前夜、お目にかかることができた。わたしと同伴していた妻をわかっていたと信じる。しばらくじっと見つめておいでだったが、言葉にならぬ声もれ、涙ぐみながら別れ際に祝福くださったようだ。

一年間公教要理を指導いただいたのは35年前。当時わたしは30歳すぎである。一対一で毎週一回、2時間近くの日もあった。福音書の一節をわたしが読むと、その部分を解説いただいた。少年の心をもつ方だった。あの頃は今のわたしよりも、10歳ちかくお若かったことになる。大きな声でよく笑った。愉快的な笑い声につられて、しばらくすると、わたしも気後れしなくなった。

いちど食事によぶと、夕方にいきなりやってくるようになった。「そこまで来たから」とニコニコ顔。「ご飯があればよろしい」が口癖なのだ。トンカツと赤ワイン、それに牡蠣と白ワインの組み合わせが好物で子供たちといっしょに夕餉を囲んだ。海外の方であればほど親しくなったのは神父さんが筆頭で

ある。

「奇蹟」がやっかいだった。原理的に奇蹟を受け容れることができなかつたわたしは、「科学知識をもつ現代人にはバカらしい」とまで言った。彼は怒った。奇蹟は至るところに見つかる、とたどたどしい日本語でまくし立てる。言いあいとなった。その夜は教会の門口までおくつてくれた。晩秋である。満天の星が輝く夜空をフランス人らしく両手をひろげてあおぎながら、「杉山さん、あの星空が奇蹟。誰がつくったのか、考えてごらん」と言った。創造主の御業すべてこそが奇蹟だ、とこのフランス人は確信している……彼にすれば「奇蹟」はDNAよろしく自分の血のなかを流れていたのである。

復活祭を迎える直前、「洗礼を受けますか」と尋ねてきた。「はい」。するとビックリするような大きな声で「神に感謝！」が返ってきた。ありがとうございました。

お別れのとき We will meet again! を耳元で繰り返した。うなずいていただいたように思う。再会の日はそう遠くもないだろう。

## 安らぎ招く「病者の塗油の秘跡」

大山

本を読むと、2行が重なって、1行に見えるようになり、白内障の手術を受ける決心をしました。6、7年前から、かかりつけの眼科の先生に、「手術もう早すぎることはないよ」と言われていました。しかし特別不自由を感じなかったのもそのままに。

親戚の男性で私と同年代、80歳前後の者がいます。同じ手術を一足早く受けていました。1度ではうまくいかず、3回手術してやっと成功。関東の病院にまで足を運んだそうです。その話を思い出して急に心配に。「手術は簡単だと聞いているが、たまにはうまくいかない場合があるようだ。もし見えなくなったらどうしよう」と不安がよぎりました。

「そうだ、『病者の塗油の秘跡』を授けていただく」。この秘跡は、「赦しの秘跡」と聖体拝領とを、同時に受けると、効果が大きいとのこと。私は神父様にお願いして、これらを2、3日の間隔で授けていただいたのです。

手術は右目と左目、2回に分けて、いずれも木曜日に行われました。手術室で、割烹着のような

ビニールの手術着に身を包む。上着もズボンも靴下の上からもスッポリ。物々しい雰囲気でした。目薬を数え切れないほど注入。目に液体が流入。手術する先生の指が、強い圧力で突っ込まれて、潰れるのではないかと思うほどでした。でも実際は、私の臆病心が過度に不安を感じたようです。

やっと終了、帰宅時には、顔の4分の1もありそんな大きな眼帯をしまったので歩行困難に。家内に手を引かれて、杖をついてポトポト。翌金曜は丸1日、土曜は午前中まで、ショックでグッタリ、寝込んでいました。ところが午後になって、急に気分が好転。眼帯もとれていました。

恐る恐る夕方のミサに与りました。行き帰りの夜道も、意外によく見える。ほとんど不自由はありませんでした。2回目の左目の時には、土曜日朝から歩くことが出来ました。

読書をして、重なって見えたところが、2行に分かれて見えるようになりました。冬の夜空の満月は円周がくつきり。以前は月の周辺に、光の滲んだような縁取りが見えましたが、少なくなっていました。もつとも左右の目には、見え方に相違がありますが。

手術が順調に進んだのは神様のお恵み、つまり「病者の塗油の秘跡」のお蔭と思っています。福音書にイエス様が病人を癒やされる様子が、しばしば記されています。

エリコの盲人は、イエス様に向かって「ダビデの子よ、私を哀れんでください」と叫び続けます(マルコ10・46)。周囲の人が叱りつけて黙らせようとしても、なおも大声で叫び続けます。遂にイエス様に呼ばれて、目に手を触れて治していただいた上「あなたの信仰があなたを救った」とお褒めの言葉までいただきました。

現代でもイエス様は、身近におられると思います。私が教会で「神父様、白内障で見えにくいので手術を受けたい。『塗油の秘跡』を授けてください」とお願いしました。それはイエス様に直接、「白内障を治してください」とお願いするのと同じではないでしょうか。

エリコの盲人が、もし現代に生きていたら、神父様のところに赴いて「見えるようになりたいのです。『塗油の秘跡』を授けてください」と願うのではないのでしょうか。

イエス様の着物の裾に触れた出血症の女性(マルコ5・26)。また「先生、私たちを憐んでください」と大声で叫んだ10人の重い皮膚病患者(ルカ17・11)。これらの人々も現代に生きていればきっと願うでしょう。「神父様、『塗油の秘跡』を授けてください」。

ところで現代は超高齢化社会。平均寿命は、女性が87・26歳、男性が81・09歳とか。教会も例外ではないですね。長寿は確かにおめでたいのですが、困った反面も。一般に80歳前後になると、体のあちこちにガタが来ます。

「目が痛い」と思ったら次は歯が。また腰や膝も痛み出す。運動不足で消化不良や便秘にも。もう次から次に不具合が出てきます。しかも若い時と比べ回復は遅々として進みません。

老境に達して心の平安を望む者は、どうしても病気と上手に付き合う必要があります。「病者の塗油の秘跡」は、これを助けてくれる極めてありがたいお恵みです。

お年寄りが、入院や手術をする場合、多くは人目につかないようにこっそりされます。これは若い頃からの習慣によるのでしょうか。

誰でも若い時は「病院大嫌い」と豪語していたのに、年をとると一転、「お医者様大好き」人間に。特効薬やサプリメントにも関心を抱きます。

「塗油の秘跡」を受けなくても手術が成功、病気が回復する場合があります。しかし秘跡を受けておけば、もっと楽により結果が出るでしょう。「赦しの秘跡」と聖体を同時に授けていただければ効果はさらに大きいでしょう。

病気には様々な不安が伴います。「本当に治るだろうか。いつ頃退院できるのか」。「沢山の薬が与えられるが、あるものは体に合っていないんじゃないか」。「もっと腕のよい病院があるのではないか」。「家族が負担にたえられるだろうか」。小康を得ても「また再発しないか」。

軽くしていただけるのは、このような不安です。時によっては、何か霊的な進歩も与えられるような気がします。忍耐が深まるとか、み旨を受け入れる心構えが出来るとか。

私がこの秘跡のありがたさを経験したのは、2年ほど前、がんの手術を受けた時です。手術を2度、入院を3度程しましたが、畠基幸神父様は、その度にこの秘跡を授けてくださいました。併せて3度か4度ほど。秘跡のお恵みを体感しましたが、それは言葉では言い表せない安らかさで、しかも豊かなものでした。

以降、手術や入院が決まった場合は、自分から教会に赴いて、神父様に授けていただきます。これを家族にも強く勧めています。もし神父様が「それは軽い病気で秘跡をうける必要はないよ」といわれれば、それで十分です。安心して従えばいいのです。

このようなありがたい秘跡ですので、もっと詳しく知りたいと思って「カトリック教会のカテキズム」を開いてみました。この書物は800頁以上もある膨大なもので、普段はあまり読まないのですが、「病者の塗油の秘跡」の項は、わずか9頁。必要でもあるので読み通すことが出来ました。記事は、福音書でキリスト様が病人を癒やされた時のような、暖かい思いやりに満ちていました。死ぬ時の心構えまで記されています。

しかし、注意すべきは、この秘跡を受けても病気が治らない場合です。「カテキズム」は聖パウロの例を引いて教えています。

『いかに熱心な祈りをしたとしても、すべての病気が治されるとは限りません。例えば、聖パウロはキリストから、「わたしの恵みは、あなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分発揮されるのである。』(1508項)聖パウロは、願いを直接的には叶えられなかったのです。しかし彼は、安らかにみ

旨に従ったのです。

この結果、受ける苦しみは「キリストの苦難と一致して、教会の聖化とすべての人の善益に寄与する」と教えています。しかしこの点は私には難解で、再読三読する必要があると感じます。

この秘跡が不安を和らげてくれる効果について、次のように考えました。

私がキリスト様に「がんを治してください」とお願いしたとします。キリスト様は「よろしい、治してあげよう」とは仰有らない場合があるのです。代わって「明日のことは明日自ら思い煩いなさい。一日の苦労は一日で十分だよ」と仰有ったとします。すると私はどう感じるでしょうか。

「治らんかも知れんが、なんとかしてくださるだろう。私にとって、もっとも良いように計らってくださるに違いない。神様に任せ切ろう」。

## 短歌

魚らもシモンの網にかからんと

水面まで来つ御言葉を聞き

野うさぎのつがいのように駆けのぼり

階段をゆくスニーカー見ゆ

パウロ

## 表紙の写真について

ガブリエル・ブレシュト神父様がカトリック池田教会の助任司祭を務められていた時(1983年6月～1987年4月)に撮影された写真。退任後の1998年5月には叙階50周年記念ミサと祝賀会が池田教会で執り行われたその時に、撮影された神父様の写真(下)は表紙の写真と同様に眼から光が、口から笑いが発せられていた。



## 宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

### ■日帰り黙想会

3月28日(木) 10:00～15:30

指導: 山内十束神父

3月29日(金) 10:00～15:30

指導: 山内十束神父



### ■週末黙想会

3月23日(土) 17:00～3月24日(日) 15:30

指導: 稲葉善章助祭

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎0797(84) 3111

## 編集後記

季節柄か「ほっこり、しました」「ほっこり、したい」を会話や投稿で見聞きすることが多い。

まさに「ほっこり」とは、温泉につかったり、鍋物を食べたりと直接身体が温まる様子が思い浮かぶ。

他方、気持ちの上での「ほっこり」感もある。こちらの方は、心に永く留まり思い出の一コマにもなったりする。旅行や外出先で、偶然『カトリック〇〇教会』に出会うと安心感も加わり、なんだか「ほっこり」してしまう。そんな経験をお持ちではないだろうか。そこには、共同体の連帯意識がはたらくのかもしれない。

近年池田教会にも、外国籍の方がミサにあずかる機会が増へ、立ち寄っていただいた折には「当教会のほっこり」をあげてほしい。

天使の微笑

## 3月の教会カレンダーの追加

3月3、10、17、24日(日) 13:00～14:30

信仰入門

3月7、14、21、28日(木) 10:30～

聖書百週間

3月8、22日(金) 14:00～16:00

福音書を学ぶ会

3月31日(日) 四旬節黙想会

黙想指導は中村克徳神父